

人情のブラジル

フォトジャーナリスト
渋谷 敦志

空から一望したリオデジャネイロの街並み



LFCで教育を受ける子どもたち



CRIARTに通うヴィヴィアーニさんと2人の息子

18年前、大学を休学して1年間、サンパウロにある法律事務所での研修を受けたことがある。それ以来、ブラキチ（ブラジル大好き人間）を自認して、写真を撮りながらブラジルを旅している。

その僕にこの原稿の依頼があったのは、2014 FIFAワールドカップが始まる前。ブラジルの決勝戦を見てから書くとうと油断していたら、サッカー王国ブラジルは準決勝のドイツ戦で史上最悪のスコアで大敗してしまい、しばらく放心状態だった。僕でさえ相当ショックを受けたのだから、ブラジル人には話題にもしたくないような悪夢なのだろう。しかし、今年2月にリオデジャネイロを訪問した際、現地はさぞ高揚しているのかと思いきや、しらけている人が多かったのが意外だった。今回のワールドカップへの巨額な税金の浪費、サッカー界の行き過ぎた商業化、拡大する格差社会への不満、不十分な医療や福祉のサービス…。街中で聞いたこれらの声は、後に各地で頻発した抗議デモの主張と重なっている。

同じような問題は、僕が住んでいたころからあった。しかしブラジルは今、国内総生産（GDP）で世界第7位まで経済が発展した。

なかなか難しく、ずっとボウサの中にいる」と、LFCのマガリャンス校長は指摘する。

大麻やコカインなどドラッグのまん延も、社会に深刻な影を落としている。貧困地域には娯楽が少ない。若者らは週末に、アメリカンパーティーを家で開き、食べ物を持ち寄り「ドラッグ」をする。そんな18歳以下の少年を麻薬を売買する組織は取り込んでいく。子どもは刑務所に送られないからだ。ブラジルだからといって、みんながサッカーをしているわけではないのだ。

少年だけではない。「かわいらしい人形で遊んでいた11歳の少女が、翌日まるで大人の女性のようにセックスの話をしている。子どもの世界にセックスとドラッグが入り込んでいる」とマガリャンス校長は視線を落とした。

もう一つは、リオデジャネイロ市内にあるCRIARTという、主に自閉症や発達障害を持つ人たちとその家族をサポートしているNGOだ。行政の財政支援はずっと滞っていて運営は容易でないようだが、この地域では障害者支援の活動をする団体が少ないため、不可欠な存在となっている。

自閉症の息子2人を育ててきたヴィヴィアーニさんにとって、CRIARTは第2の家族だという。

「木の柵で囲まれた道を牛が歩く。その道は牛しか通れない。この社会は柵なのよ。そこを通る以外の選択肢を与えてくれない」。

ワールドカップ、そして2年後のリオデジャネイロでの夏季オリンピックを控えて世界の耳目を集めるようになり、社会的な矛盾をカモフラージュできなくなってきたのは間違いない。

今年訪問した2つのNGOの活動から、不満や抗議の声の向こうにある現実を垣間見たいと思う。

リオデジャネイロ北部、ドゥケ・デ・カシアスにあるLat. Fabiano de Cristo (LFC)は1958年、社会から見捨てられていた貧困地区の子どもたちを救済しようと設立されたNGOだ。貧しい家庭の子どもを預かる託児所のような活動から始まり、今では全国65カ所の施設を持つほどになった。それだけニーズが増えているということだろう。

LFCに来る子どもの親の多くがシングルマザーだ。性的な暴力を受けたり、夫が犯罪に手を染めたりして、子どもを安心して育てる環境を失っている。ほとんどが貧困層向けの公的給付金「ボウサ・ファミリア」を受けているが、「効果は一時的で、逆に援助依存の入り口になっている。出口は仕事を見つけて社会的に自立することだが、学歴なしでは

しかしCRIARTはどんな障害者も受け入れ、子どもの好奇心を育む教育を与えてくれる。ヴィヴィアーニさんは、社会での本当のチャレンジは障害者を育てることではなく、柵である社会を変えることなのだという。「私がプレッシャーを感じるのは、朝起きた時、体の大きい2人の息子を起すことだけ。CRIARTは毎日発見があるから前に進むことができるの」。ヴィヴィアーニさんの持ち前の明るさに、他の母親たちは勇気付けられている。

滞在の終わりに、リオデジャネイロに住むブラジル人の親友と再会した。「金、金、金だよ、今のブラジルは。金で装飾が立派になっただけだ」。彼のブラジル社会への見方は前よりも手厳しかった。

ワールドカップを通じて見えるブラジルは、まさに装飾で彩られたイメージだ。それを否定するわけではないが、僕がブラキチになった理由はそこじゃない。ブラジルの魅力は何とんでもない。友人や家族を何よりも大事にする人情や、どんな人種も差別なく受け入れる寛容さなど、日本社会に足りないものがブラジルにあった。

その魅力をかすませるような問題を放置したまま装飾を重ねてほしくはない。ブラジルには人に優しい社会づくりを波及してほしいと思うのは、ブラキチの独り善がりだろうか。

<Profile>

しぶや・あつし

1975年大阪府出身。高校生の時にベトナム戦争の写真を見てフォトジャーナリストを志す。大学在学中にブラジル・サンパウロの法律事務所での研修しながら本格的に写真を撮り始める。2002年London College of Printing(現ロンドン芸術大学)卒業。現在は東京を拠点に、紛争や貧困の地で生きる人々の姿を写真と言葉で伝えている。MSF(国境なき医師団)フォトジャーナリスト賞、日本写真家協会展覧会賞などを受賞。共著に「ファインダー越しの3.11」(原書房)。